

アメリカ合衆国
最高裁判所



「国家は永続する。これはその忠誠を象徴するものである。」

最高裁長官

チャールズ・エバンズ・ヒューズ

最高裁判所
建築

演説



アメリカ合衆国 最高裁判所

目次

- 裁判所と憲法の解釈／5
- 裁判所の機関的位置付け／9
- 裁判所とその伝統／11
- 裁判所と訴訟手続き／13
- 裁判訴訟件数／14
- 最高裁判所の判事／15
- 裁判所の建物／24
- 建物の見学案内／27

本紙はアメリカ合衆国最高裁判所により作成され、刊行に際しスプリームコート・ヒストリカル・ソサイエティーの協力を得ました。

表紙の写真はフランツ・ジャンゼン撮影。特に記載されている場合を除き、掲載された写真はアメリカ合衆国最高裁判所の收藏品。

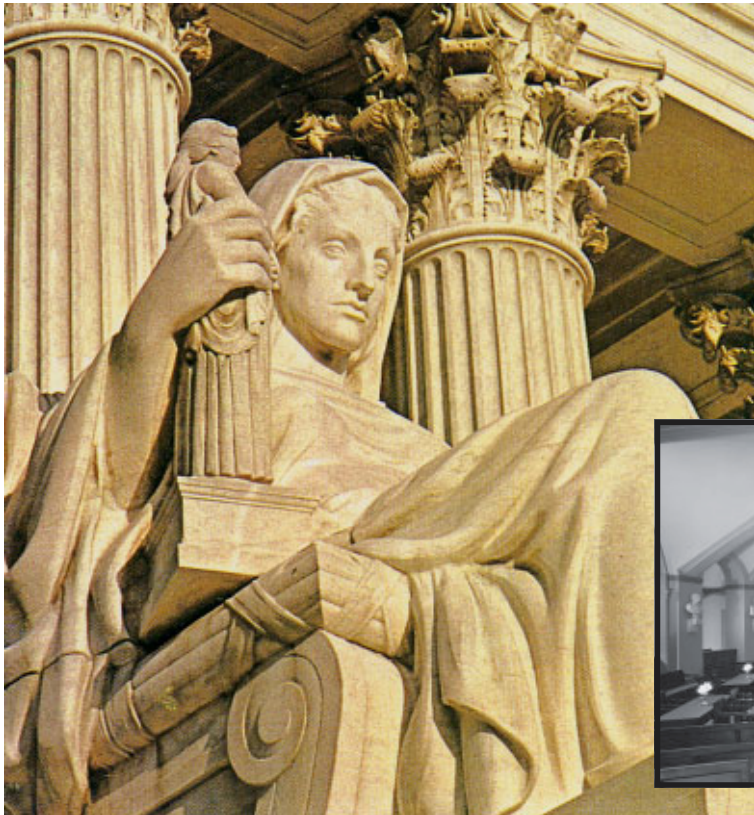
裁判所を描いたクリスマスカード
C. 1940

裁判所と憲法の解釈

「法の下での平等な正義」 - 最高裁判所建物の正面入口の上部に刻まれたこの言葉はアメリカ合衆国最高裁判所の究極の責任を端的に表現しています。アメリカ合衆国の憲法と法規の下に取り上げられる、いかなる訴訟、論争に関しても最高裁判所が国家の最高司法権を行使します。法の最終判決を下す最高裁判所は、アメリカ国民に対して法の下での平等な正義という国家の約束を守りぬく任務を負い、この任務ゆえに憲法の番人、解釈者としての役割を果たします。

最高裁判所長官、チャールズ・エバンズ・ヒューズは、最高裁判所を「その概念と機能において極めてアメリカ的な機関である」と語りました。憲法の解釈に関しアメリカの最高裁判所と同等の権威を持つ法廷は世界でも類稀であり、これほどの長い期間にわたり、これほどの影響力をもって行使されているという点ではアメリカの最高裁判所の右に並ぶものはありません。150年ほど前に、フランスの政治批評家、アレクシス・ド・トクビルは国家と法律の歴史という観点から最高裁判所の独特な位置付けについて次のように語りました。「ヨーロッパの多くの国家が政府代議制を取り入れたが、これまでの所、アメリカと同様の方式で司法権を組織立てている国家に出会ったことがない。アメリカ最高裁判所は人類が産み出した最も堂々たる権威をもつ司法権を行使している。」

最高裁判所の独特な位置を支える根幹は、主にアメリカ人の法と立法政府への奥深い誓約にあります。アメリカ合衆国は、その成文憲法の維持と保護に未曾有の決意を表わしてきました。この決意がアメリカによる「民主主義の試み」に、今日まで効力を発揮し続ける最古の成文憲法を供しているのです。



左は正面階段に見られるジェームズ・アール・フレイザーによる「正義の熱視」(コンテンプレーション・オブ・ジャスティス)

下は、修復された米国国会議事堂内の最高裁判所判事室、1812年から1819年の間を除き1810年から1860年まで最高裁判所はここに会した。

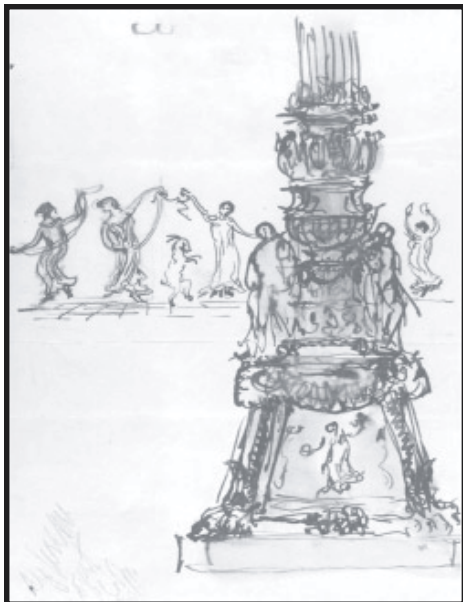


アメリカ合衆国憲法は注意深く均整のとれた文書です。これは国家政府が十分堅固に、かつ融通性をもって国家の要求を満たすことができるよう作成されました。なおかつ、十分に限定的で国民の保証された権利の保守に制限されています。そのため、社会の秩序要請と個人の自由権の間のバランスをとることができるのです。こうした要求を確実に満たすため、憲法の起草者は独立した三権分立の政府機関を設けました。2世紀以上にわたる奮闘期を超えて憲法が民主主義政府を実現せしめた事実こそアメリカ政府機関の真髄を表しています。

この体制における最高裁判所の複雑な役割は、裁判所の熟慮した審判の下に違憲と見做される法規、ならびに行政行為を無効にする権限から派生しています。この「違憲立法審査権」が裁判所に個人の権利確保、ならびに大綱としての条項が複雑化する新状況においても継続的に適用されるべく「生きた憲法」を維持する目的において重大な任務を課してきました。

違憲立法審査機能は憲法に明示されていないものの、この機能は憲法の採択以前に当然のこととして求められていました。1789年以前に、州裁判所は既に州法に反すると見做した法規を撤回、無効にする機能を果たしていました。さらに、アメリカ開拓の父達は憲法に関して最高裁判所におけるこの機能の遂行を期待していました。例えば、アレクサンダー・ハミルトン、ならびにジェームズ・マディソンは憲法の採択を促す連邦党新聞に違憲立法審査権の重要性についてはっきりと投稿しています。

広場街灯柱の鉛筆と
インクのスケッチ。
最高裁判所建築家、
カース・ギルバートの作品
c. 1930



ハミルトンは法令は単に国民の部分的、一時的な意図を示すものに過ぎず、違憲立法審査権を通して憲法の定めに従い、すべて国民の意思が法の意図を司るよう裁判所が確証すべしと記しました。また、マディソンは憲法の解釈は政策の渦中にある騒動や衝突に左右されることなく、独立した裁判官の熟慮した審判に委ねられるべきであると述べました。「憲法の問題すべてが公的政策的取引によって決定されるならば、憲法は派閥争い、政治欲求、さらに党派心の闘争の場へと墮しめられるであろう」とマディソンは説いています。

こうした背景にもかかわらず、違憲立法審査に関する裁判所の権限が明確にされたのは1803年になってからでした。これはマルベリー対マディソン判決でジョン・マーシャル長官が発動したものです。この決定において、最高裁判所長官は違憲と見做される法規の撤回に関する責任は憲法維持の宣誓の下に最高裁判所に生じた義務に基づく必須の帰結であると述べました。この権限以外に宣誓を成就する手段はないと見做したのです。「法の何たるかを説くのは何よりも司法機関の本分である」とマーシャルは主張しました。

振り返ってみると、憲法の解釈と適用の決定は憲法自身の大綱的性質ゆえに必須事項であったことは明らかです。開拓の父達は賢明にも憲法をむしろ一般的な言葉で記すことにより変わりゆく状況に応じた考察を加える余地を残したのです。マクロー対メリーランド判決においてマーシャル長官は、全適用に関する詳細を規定しようとする憲法には「法規の冗漫がうかがえる。こうした憲法が人類の精神によって信奉されることはほぼ不可能に等しい。憲法の性質として、多卒の大綱のみを記し、重要な目的を明示し、その目的を構成する些細な事項は目的自体の性質から削除する必要がある」と述べました。

憲法は法廷の取扱事項を「訴訟」と「論争」のみに限定しています。初代裁判所長官、ジョン・ジェイは、外交政策決定の提案に関する憲法のかかわりについて助言を求めたジョージ・ワシントン大統領の要請を断り、裁判所の歴史の初期段階でこの制約を明確に示唆しました。裁判所は相談役として意見を述べるものではなく、その機能は特定の事件の解決のみに限られるのです。毎年、多くの州、および連邦裁判所から6,500権以上におよぶ民事、刑事訴訟が最高裁判所に提起されます。そのため、どの訴訟を取り上げるかという決定において判事はかなりの裁量を発揮しなければなりません。また、最高裁判所は各州間、ならびに州と連邦政府の間の論争から稀に生じる訴訟に対しても「第一司法権」を行使します。

最高裁判所が憲法にかかわる問題に判決を言い渡すと、その判決は実質的に最終審判となります。つまりその判決は稀に訴求される憲法改正手続き、あるいは裁判による新判決以外によって変更されることがありません。しかしながら、法の解釈に関する問題に関しては新たな法行為をとることが可能です。

マーシャル最高裁長官は、こうした多大なる権威の下、自由政府の維持に関し最高裁判所が直面する問題への申し立てについて「私達が解釈するのはいかしくも憲法なのであり、後世の長い年月にわたる継続適用の意図をもち、結果的に人類の生業における様々な危機に漸次適用されるものであるという事実を肝に銘じなければならない」と述べています。



麦のモチーフを施したブロンズのエレベーターの扉は彫刻家、ジョン・ドネリーの作品。
これは建物内の繊細な彫刻を代表する逸品。

裁判所の機関的位置付け

憲法は最高裁判所の正確な権限、特権、あるいは司法機関の包括的組織について詳しい規定を述べていません。そこで、連邦司法と連邦法の大綱を作り上げる作業は議会と裁判所判事の裁量に委ねられています。

連邦司法の確立は新政府の優先事項でした。そしてアメリカ合衆国上院に提出された第一の法案が1789年の司法例となったのです。この条例は国家を13の司法区に分け、これをさらに大きく3つの範囲、つまり東部、中部、南部に組織立てました。国家の最高司法権をもつ最高裁判所は国家の首都に置かれ、当初は裁判所長官と5人の陪席判事から構成されました。1800年代初葉の一時期を除く当初101年間にわたる最高裁判所の歴史において、陪席判事にも「巡回裁判の担当」が要求され、各司法区において1年に2回の巡回裁判が行われました。

第1回の最高裁判所法廷は、当時の首都であったニューヨーク市のマーチャント・エクスチェンジ・ビルで1790年2月1日に召集されました。しかし、ジョン・ジェイ最高裁長官は法廷の第一召集を翌日へと延期せざるを得なくなりました。交通事情で数人の判事が2月2日までニューヨークへ到着できなくなったのです。

裁判所の初期の会期は組織的な手続きに従事されました。第1回の訴訟は最高裁判所開廷から2年後に行われました。1792年、判事は初めての判決を言い渡しました。

最高裁判所は誕生から始めの10年間にわたり重要な決定を下し、後世に残る判例を確立しました。しかしながら、初代の判事達は裁判所の限定された裁量に異議を述べました。判事達は初期の交通事情の下での「巡回裁判」の負担についても案じていました。ジョン・ジェイ最高裁長官は1795年に裁判所を辞任し、ニューヨークの知事に就任しました。そして、ジョン・アダムス大統領の懇願にもかかわらず1800年に裁判所長官の席が空席となった際にも、再度裁判所長官の任を受けることを頑なに辞したのです。

結果的には、トーマス・ジェファソンが大統領になる少しばかり前に、アダムス大統領はバージニア州出身のジョン・マーシャルを4代目の最高裁長官に任命しました。この任命は裁判所と国家に対し重要、かつ永い影響を及ぼすことになりました。法廷の形成時期におけるマーシャル最高裁長官の精力的で秀でたリーダーシップはアメリカ政府における裁判所の顕著な役割を形成する上で中心的位置を占めました。

マーシャル長官以前の長官は短期間の任務を遂行したのですが、マーシャルは法廷に34年間と5カ月間留まり、マーシャル長官の多くの同僚も20年以上にわたって裁判所に務めました。

最高裁判所のメンバーは上院の承認を受け大統領によって任命されます。独立した司法を確保し、判事を党派の圧力から守るため、憲法は、判事は「善行」期間にわたり任務を遂行すべしと述べています。これは通常、生涯にわたる任務を意味してきました。さらに判事の独立性を確保するため憲法は、判事の報酬はその在職期間にわたり減俸されないと規定しています。

最高裁判所の判事数は1869年に現在の総計9名に落ち着くまでに6回変更されました。1790年の裁判所の組織設定以来、裁判所長官*は16名のみ、また陪席判事は97名のみであり、その平均在職期間は15年間となっています。この重要な組織的継続性を保ちつつも、裁判所はその存続期間を通して新たな判事と概念を定期的に導入してきました。平均で22カ月ごとに新任の判事が裁判所に加わっています。ワシントン大統領は6名の新任判事を任命し、大統領の第2期終了前にこの他4名の判事を任命しました。フランクリン D. ルーズベルト大統領はその長期にわたる在職期間中に8名の判事を任命し、ハーラン・フィスク・ストーンを最高裁長官に昇進させることでワシントン大統領の記録に迫っています。

中庭と街灯を支えるブロンズの亀。亀は建物の隅々に施された各種動物のモチーフの一例。



*5名の最高裁長官は任命以前に陪席判事を務めており、判事は総計108名。これは議会の閉会時に最高裁長官として臨時指名され、1795年に4カ月のみ任務についていた元判事ジョン・ラトレッジを含む。上院が同氏の承認を却下し、同氏の任命は取り下げられた。しかし同氏は最高裁長官としての司法義務を遂行したため、当時の在職者として正式に認められる。

裁判所とその伝統

最高裁判所の歴史における数々の変更を経ながらも、最高裁判所は多くの伝統を守り続け、今日の裁判所は多くの面で1790年当時の初法廷と同様の組織を維持しています。ある法律歴史家はこれを「今日でも初法廷の姿のまま開廷している」と表現しています。

まず、近年の判事は長い在職期間という伝統を引き継いでいます。ヒューゴ・ブラック判事は1971年の退職を迎えるまで34年と1カ月間、任務を務めあげました。1973年10月にウィリアム O. ダグラス判事はステファン J. フィールド判事の在職期間最長記録をぬりかえました。フィールド判事が1863年から1897年まで34年間と6カ月、任に就いたのに対し、ダグラス判事は1975年11月12日の退職までに36年間と6カ月の任を果たしたのです。

アメリカの法廷では慣習的に9名の判事が年功順に判事席に付きます。長官を中央に、最長年の陪席判事はその右側、次に古参の陪審判事は左側、というように年功順に左右交互に着席します。少なくとも1800年以降の伝統として法廷中、判事は黒いガウンを纏います。ジェイ長官、ならびに同僚達は初期の開拓時代の判事、および英国の判事が纏ったような赤い縁取りの付いたガウンを着ることで初期の法廷に彩りを加えました。黒とサーモン色のジェイ長官のガウンは現在スミソニアン美術館に保管されています。

初期の法廷では弁護士は皆、正式な「モーニング正装」で出廷しました。ペンシルバニア州の上院議員、ジョージ・ウォートン・ペッパーは、同氏がまだ若き弁護士であった1890年代、法廷に「平装」で出廷し、一騒動巻き起こした事件をしばしば友人に話して聞かせました。ホーレース・グレー判事が同席者にささやく声がもれ聞こえます。「法廷にあんなグレーのコートを着てくる不届き者は一体どこの何者かね？」ジョージ・ウォートン・ペッパーは「モーニングコート」を借りて戻るまで法廷への入廷を認められなかったとのこと。今日、正装の伝統はアメリカ合衆国に仕える法務省とその他政府の弁護士の間でのみ継承されています。

羽製のペンは法廷の眺めの一つとして今でも残されています。法廷の開廷日には初期の法廷で行われた通り毎日弁護士テーブルの上に白い羽製のペンが用意されます。

「協議前の握手の交換」も19世紀後半のメルビル W. フラー長官の時代から引き継がれる伝統です。判事達がそろって判事席へ向かうための集合時、また決定事項について検討する個別協議の開始時に各判事はそれぞれ右側の判事と握手を交わします。フラー長官は法廷での異なる見解は一つの意図の下に生まれる調和を乱すものではない、ということを忘れないよう儀礼を習慣化させました。

最高裁判所はアメリカ合衆国の国印に似た伝統的な刻印をもっています。国印と異なるのは鷲の爪の下の星が一つであるという点です。これは「唯一の最高裁判所」という憲法の作意を象徴しています。アメリカ合衆国最高裁判所の刻印は裁判所書記官の管轄として保管され、最高裁判所の下に新たに法の実践を許可された弁護士へ与えられる証明書など公的な紙面上に押印されます。現在使用されている刻印は法廷の歴代5番目のものです。

アメリカ国会議事堂を後にする陪席判事、オリバー・ウェンデルとルイス・ブランドイス c. 1928年
下：チャールズ・エバンズ・ヒューズ長官 c. 1939年



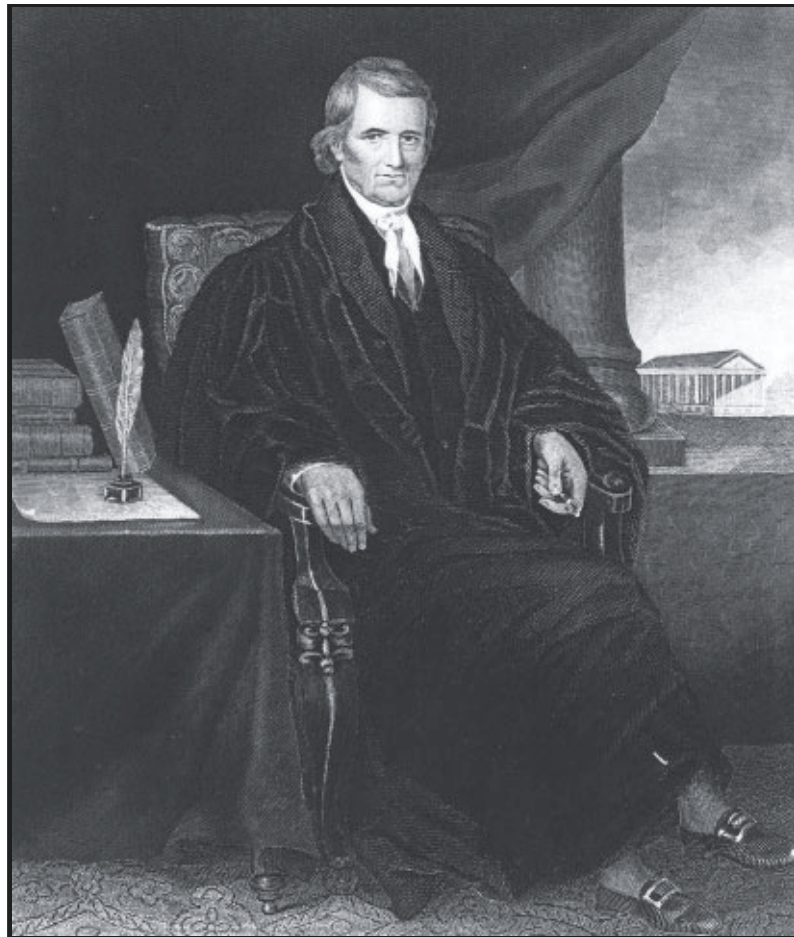
裁判所と訴訟手続き

最高裁判所の法廷は法に定めに従い、10月の第1月曜日より開廷されます。通常、法廷の会期は6月下旬、あるいは7月上旬まで続きます。会期は判事が訴訟を聴聞し、見解を示す「開廷期間」と途中にとられる「休廷期間」の2つに大別されます。休廷期間は訴訟の考慮、ならびに見解の記述に充てられます。開廷期間と休廷期間はおよそ2週間の間隔で交互に訪れます。

稀な例外を除き、訴訟の両者にはそれぞれ30分間の弁論が認められます。また一般的に1回の開廷期間中に22から24の訴訟が取り上げられます。大方の訴訟が既に他の法廷で審議された決定の再審議にかかわるものなので、ここでは陪審員や証人の発言が聞かれることはありません。いずれの訴訟に関しても法廷は前回の訴訟記録、ならびに両者の弁論を含む訴訟事件摘要書の刊行物が提出されます。

途中に介在する休廷期間中には判事は弁論済みの訴訟、および来る訴訟の研究を行い、それぞれの見解をまとめあげます。

ジョン・マーシャル長官、
アロンゾ・チャップルによる
彫刻。c. 1863



毎週判事は州、および連邦裁判所の判決の再審議を求める110件以上の請願書を検討し、どの訴訟に関して弁護士の口頭弁論を伴う完全な再審議を許可すべきか決定しなければなりません。

裁判の開廷期間中には公開法廷は午前10時に時間厳守で開始され、正午から1時間の昼食休憩を経て午後3時まで取り行われます。木曜日と金曜日にはいかなる公開法廷も行われません。弁論期間、およびこれに先立つ週の金曜日には判事が集まって弁論済みの訴訟を協議し、再審議の請願に関する協議、投票を行います。

裁判の開廷時には、午前10時に執行官が判事の法廷への入廷を告げます。鐘の音が響くと、出席者が皆起立して見守る中、ガウンを纏った判事が伝統的な詠唱に迎えられ席に付きます。「アメリ

カ合衆国最高裁判所、誉れ高き長官と陪席判事の入廷。静粛に！静粛に！静粛に！誉れ高きアメリカ合衆国最高裁判所に用向きのある者は皆、近くへ集まり注目せよ。これをもって裁判が開廷される。神よ、アメリカ合衆国とこの誉れ高き法廷を守りたまえ！」

口頭弁論の聴聞に先立ち、法廷のその他の要件が処理されます。月曜日の朝には訴訟の受理、却下を含めた法廷の判決の公開報告書である判決一覧の公開、ならびに弁護士会への新規会員の入会手続きが処理されます。見解の表明は定例では火曜日と水曜日の朝、ならびに法廷の開廷期間にあつて、弁論の聴聞が行われない第3月曜日に取り行われます。

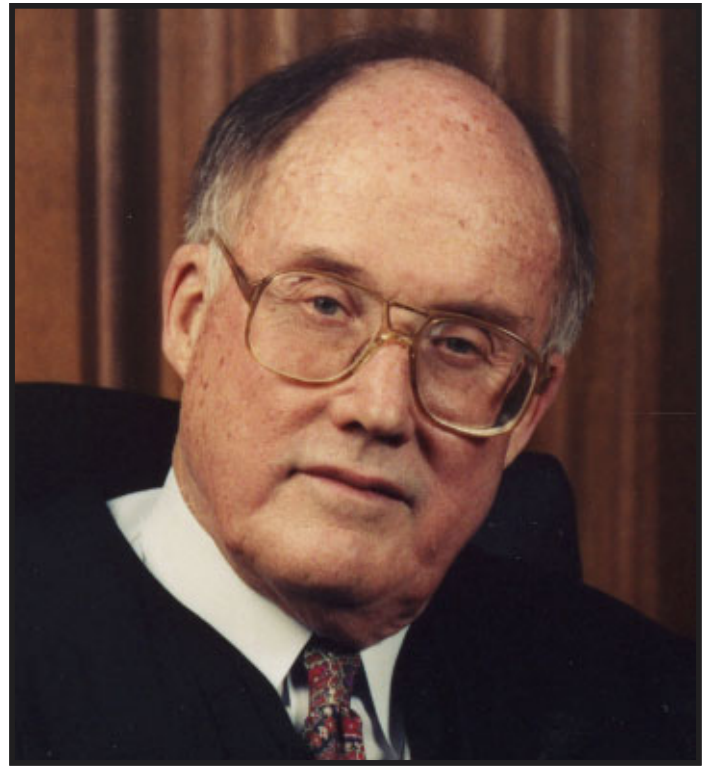
裁判所は開陳の用意の整った訴訟がすべて聴聞を経て裁決されるまで、会期を通してこのスケジュールを繰り返します。5月と6月には裁判所は判決と見解の発表のみを行います。裁判所は6月下旬に休会しますが判事の職務は絶えません。夏の間、判事は再審議の新規請願書を分析し、動議と申請を考慮し、さらに秋季からの弁論が予定されている訴訟に関する用意を整えなければなりません。

裁判訴訟件数

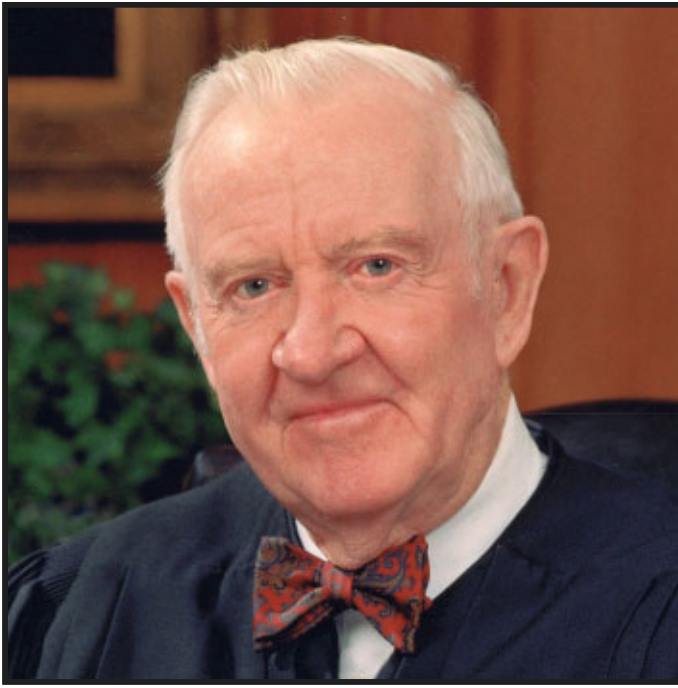
裁判所の訴訟数は着実に増え続け、現在では一会期ごとの未決訴訟事件数が合計で6,500件を超えます。これは近年、殊に顕著な増加傾向を示しています。1960年には未決訴訟事件数は2,313件のみ、1945年には1,460件のみが取り扱われました。弁護士による口頭弁論を含む正式な再審議は一会期中に120から150件しか認められません。正式な書面による見解報告は115件から130件のみです。

およそ75から100件のその他の訴訟が正式な審議を認められることなく処理されます。同意見、反論、判決を含む書面による会期ごとの見解書刊行物は5,000ページにも及びます。見解の申には、告知までに10数回以上にわたって再審議されるものもあります。

最高裁判所の
判事

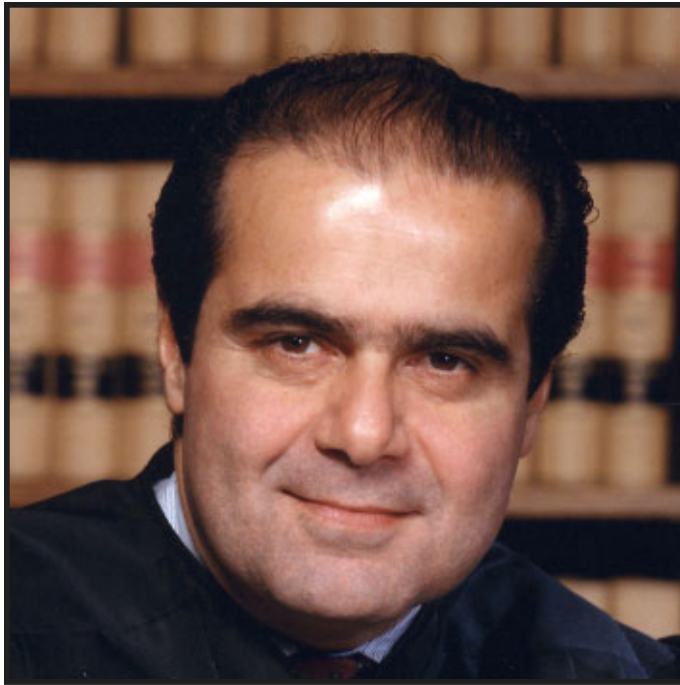


ウィリアム H. レンキスト。アメリカ合衆国最高裁判所長官。1924年10月1日、ウィスコンシン州ミルウォーキーに生まれる。今は亡き夫人ナタリー・コーネルと結婚、ジェームズ、ジャネット、ナンシーの3人の子供をもつ。1943年から1946年までアメリカ合衆国空軍に入隊。スタンフォード大学にてB.A.、M.A.、LL.B.を取得、さらにハーバード大学にてM.A.を取得。1951年及び1952年の会期中、アメリカ合衆国最高裁判所長官、ロバート H. ジャクソンの下で法務事務官を務める。1953年より1969年までアリゾナ州フェニックスにて弁護士業を営む。1969年より1971年まで法制審議会の司法長官補佐を務める。ニクソン大統領により最高裁判所判事に任命され、1972年1月7日に陪席判事の任に就く。レーガン大統領により最高裁判所長官に任命され、1986年9月26日より現職に就く。



ジョン・ポール・スティーブズ。陪席判事。1920年4月20日、イリノイ州シカゴに生まれる。マリアン・マルホランドと結婚、ジョン・ジョセフ、キャサリン・スティーブズ・ジェディツカ、エリザベス・ジェーン・セシーマン、スーザン・ロベルタ・マランの4人の子供をもつ。シカゴ大学にてA.B.を取得、ノースウエスタン大学でJ.D.を取得。1942年より1945年までアメリカ合衆国海軍に入隊。1947年の会期中、アメリカ合衆国最高裁判所長官、ワイリー・ラトレッジの下で法務事務官を務める。1949年イリノイ州での弁護士業開業を認められる。1951年より1952年までアメリカ合衆国衆議院の司法委員会の独占権の研究に関する小委員会の顧問補佐を務める。また、1953年より1955年まで独占禁止法の研究に関する司法長官の全国委員会の委員となる。1970年より1975年まで第7巡回裁判に対するアメリカ合衆国控訴裁判所の判事を務める。フォード大統領により最高裁判所の陪席判事に任命され、1975年12月19日より現職に就く。

サンドラ・デイ・オコナー。陪席判事。1930年3月26日、テキサス州エルパソに生まれる。1952年、ジョン・ジェイ・オコナーと結婚、スコット、ブライアン、ジェイの3人の子息をもつ。スタンフォード大学にてB.A.、LL.Bを取得。1952年より1953年までカリフォルニア州サンマテオ郡の次席検事を務める。また、1954年より1957年までドイツ、フランクフルトのクォーター・マーケット・センターの民事弁護士を務める。1958年より1960年まで、アリゾナ州メアリーベールで弁護士業を営み、1965年より1969年までアリゾナ州の司法長官補佐を務める。1969年アリゾナ州上院議員に任命され、2年間の任期に2期連続再選される。1975年、マリコパ郡高等裁判所判事に選出され、1979年まで判事を務める。同年、アリゾナ州控訴裁判所に任命される。レーガン大統領により最高裁判所の陪席判事に任命され、1981年9月25日より現職に就く。



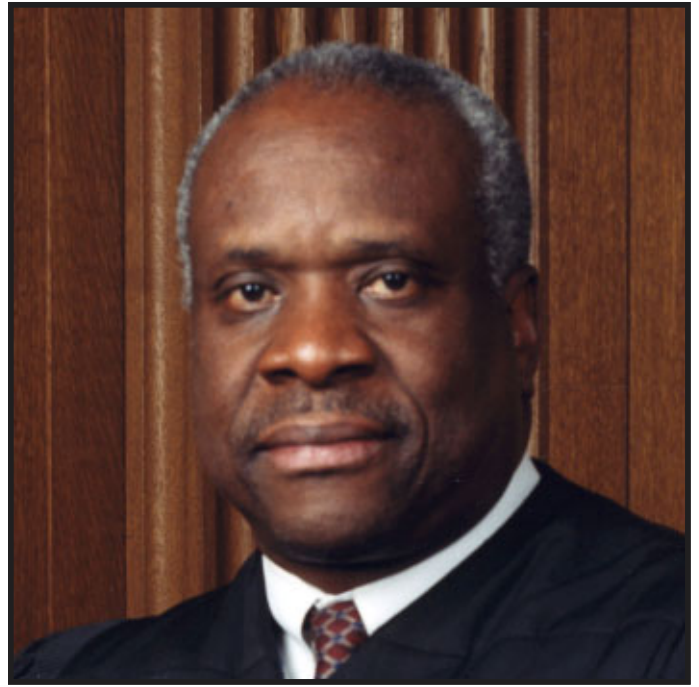
アントニン・スカリア。陪席判事。1936年3月11日、ニュージャージー州トレントンに生まれる。モーリーン・マッカーシーと結婚、アン・フォーレスト、ユージーン、ジョン・フランシス、キャサリン・エリザベス、メアリー・クレア、ポール・デイビッド、マチュー、クリストファー・ジェームズ、マーガレット・ジェーンの9人の子供をもつ。ジョージタウン大学、およびスイスのフリバーク大学にてA.B.を取得、さらにハーバード大学にてLL.B.を取得。1960年から1961年までハーバード大学のシェルドンフェローを務める。1961年より1967年までオハイオ州、クレブランドにて弁護士業を営む。1967年より1971年までバージニア大学ロースクールにて法学の教鞭をとる。1977年より1982年までシカゴ大学で教鞭を取り、ジョージタウン大学、スタンフォード大学でも客員教授を務める。1981年より1982年までアメリカ弁護士会の行政法部門会長を務め、1982年より1983年まで各部門会長の相談役を務める。1971年より1972年までテレ・コミュニケーション・ポリシーに関するゼネラルカウンセル、1972年より1974年まではアメリカ合衆国行政協議会会長、1974年より1977年までは法務局司法長官補佐として連邦政府に務めた。1982年ワシントンD.C.巡回裁判所に対するアメリカ合衆国控訴裁判所の判事に任命される。レーガン大統領により最高裁判所陪席判事に任命され、1986年9月26日より現職に就く。



アントニー M. ケネディー。陪席判事。1936年7月23日、カリフォルニア州サクラメントに生まれる。メアリー・デービスと結婚、ジャスティン・アントニー、グレゴリー・デービス、クリスティン・マリーの3人の子供をもつ。スタンフォード大学、およびロンドン大学経済学部にてB.A.を取得、さらにハーバード大学にてLL.B.を取得。1961年より1963年までカリフォルニア州サンフランシスコ、1963年より1975年までカリフォルニア州サクラメントにて弁護士業を営む。1965年より1988年までパシフィック大学、マクジョージ・ロースクールにて憲法の教鞭をとる。1961年のカリフォルニア州国防軍のメンバーを務め、1987年より1988年間は連邦司法センター委員、1979年より1987年まで財務開示報告及び司法行為の諮問機関（後に品行法諮問委員会と改名）の諮問委員、および1979年より1990年まで太平洋領土委員会委員、内1982年より1990年までは同委員会会長とアメリカ合衆国の司法コンフェレンスの2委員会に従事する。1975年第9巡回裁判所に対するアメリカ合衆国控訴裁判所に任命される。レーガン大統領により最高裁判所の陪席判事に任命され、1988年2月18日より現職に就く。



デイビッド・ハケット・スーター。陪席判事。1939年9月17日マサチューセッツ州メルローズに生まれる。バーバード大学にてA.B.を取得。オックスフォード大学マグデーランカレッジにてローデス・スカラーを2年間受賞し、オックスフォード大学にて法学A.B.ならびにM.A.を1989年に取得。ハーバード大学にてLL.B.を取得した後、1966年より1968年までニューハンプシャー州、コンコードのオール・アンド・リノ社にてアソシエートとして勤務。1968年ニューハンプシャー州の司法長官補佐となる。1971年、司法長官代理となり、1976年ニューハンプシャー州の司法長官となる。1978年、ニューハンプシャー州高等裁判所の陪席判事に任命され、1983年にはニューハンプシャー州最高裁判所に陪席判事として任命される。1990年5月25日、第5巡回裁判に対するアメリカ合衆国控訴裁判の判事となる。ブッシュ大統領により最高裁判所の陪席判事に任命され、1990年10月9日より現職に就く。



クレアランス・トーマス。陪席判事。1948年6月23日、ジョージア州サバナ近くのピンポイント地区に生まれる。1987年、バージニア・ランプと結婚、前夫人との間に子息、ジャマル・エイディーンをもつ。コンセプション・セミナリー校に学び、ホーリークロスカレッジを優等で卒業A.B.を取得、さらに1974年イエール大学ロースクールにてJ.D.を取得。1974年ミズーリ州にて弁護士開業を認可され、1974年より1977年までミズーリ州の司法長官補佐を務める。1977年より1979年までモンサント社で弁護士を務める。1979年より1981年まで上院議員ジョン・ダンフォースの法務補佐を務める。1981年より1982年まで、アメリカ合衆国文部省にて市民権に関する長官補佐を務め、1982年より1990年までアメリカ合衆国雇用機会均等法委員会の委員長を務める。1990年ワシントンD.C.巡回裁判に対するアメリカ合衆国控訴裁判所の判事となる。ブッシュ大統領により最高裁判所の陪席判事に任命され、1991年10月23日より現職に就く。



ルース・ベダー・ギンズバーグ。陪席判事。1933年3月15日ニューヨーク州ブルックリンに生まれる。1954年マーティン D. ギンズバーグと結婚、子女ジェーンと子息ジェームズをもつ。コーネル大学にてB.A.を取得、ハーバード大学にて学び、コロンビア大学にてLL.B.を取得。1959年より1961年までニューヨーク州アメリカ合衆国地方裁判所南地区の名誉判事、エドモンドL. パルミエリの下で法務事務官を務める。1961年より1963年まで国際プロシージャに関するコロンビア大学ロースクールの研究プロジェクトのリサーチ・アソシエート、さらにアソシエート・ディレクターを務める。1963年より1972年までラトガー大学ロースクール、1972年より1980年までコロンビア大学ロースクールにて教鞭をとる。1977年より1978年までカリフォルニア州スタンフォードにて行動科学高等研究センターにて特別研究員を務める。1971年、アメリカン・シビル・リバティーズ・ユニオン (ACLU) の女性の権利プロジェクトの打ち上げにあたり重要な役割を果たす。1973年より1980年までACLUの顧問相談役、1974年より1980年まで国家理事会に務める。1980年にワシントンD.C.巡回裁判に対するアメリカ合衆国控訴裁判所の判事となる。クリントン大統領により最高裁判所の陪席判事に任命され、1993年8月10日より現職に就く。



ステファンG. ブレーヤー。陪席判事。1938年8月15日カリフォルニア州サンフランシスコに生まれる。1967年、ジョアンナ・ヘアーと結婚、クローエ、ネル、マイケルの3人の子供をもつ。スタンフォード大学にてA.B.、オックスフォード大学マグデアランカレッジにてB.A.、さらにハーバード大学にてLL.B.を取得。1964年の会期中、アメリカ合衆国最高裁判所のアーサー・ゴールドバーグ長官の下で法務事務官、1965年より1967年まで独占禁止法に関するアメリカ合衆国司法長官の特別補佐、1973年、ウォーターゲート特別起訴事件の特別検察官補佐、1974年より1975年までアメリカ合衆国上院司法委員会の特別顧問、1979年より1980年まで委員会のチーフ顧問を歴任する。1967年より1994年までハーバード大学ロースクールにて準教授、教授、講師として法学の教鞭をとり、1977年より1980年までハーバード大学ケネディー・スクール・オブ・ガバメントにて教授、オーストリア、シドニーのロースクール、さらにローマ大学にて客員教授を務める。1980年より1990年まで第1巡回裁判のアメリカ合衆国控訴裁判所の判事、1990年より1994年まで同裁判所長官、1990年より1994年までアメリカ合衆国司法コンフェレンス委員、1985年より1989年までアメリカ合衆国判決委員会委員を務める。クリントン大統領により最高裁判所陪席判事に任命され、1994年8月3日より現職に就く。



アメリカ合衆国最高裁判所。下段左から：アントニン・スカリア判事、ジョン・ポール・スティーブンス判事、ウィリアム H. レンキスト長官、サンドラ・デイ・オコーナー判事、アントニー M. ケネディー判事。上段左から：ルース・バーダー・ギンズバーグ判事、デイビッド H. スーター判事、クレアランス・トーマス判事、ステファン G. ブレーヤー判事。

アメリカ合衆国 最高裁判所メンバー

氏名	出身州	任命大裁額	(B) 司法宣誓日	任務終了日
長官				
ジェイ、ジョーン	ニューヨーク	ワシントン	(a) 1789年10月19日	1795年6月29日
ラトレッジ、ジョーン	サウスカロライナ	ワシントン	1795年8月12日	1795年12月15日
エルスワース、オリバー	コネチカット	ワシントン	1796年3月8日	1800年12月15日
マーシャル、ジョーン	バージニア	アダムス、ジョーン	1801年2月4日	1835年7月6日
テーニー、ロジャー・ブルック	メリーランド	ジャクソン	1836年3月28日	1864年10月12日
チェース、サーモン・ポートルランド	オハイオ	リンカーン	1864年12月15日	1873年5月7日
ウエイト、モリソン・レミック	オハイオ	グラント	1874年3月4日	1888年3月23日
ブラー、メルビル・ウェストン	イリノイ	クレブブランド	1888年10月8日	1910年7月4日
ホワイト、エドワード・ダグラス	ルイジアナ	タフト	1910年12月19日	1921年5月19日
タフト、ウイリアム・ハワード	コネチカット	ハーディング	1921年7月11日	1930年2月3日
ヒューズ、チャールズ・エバンズ	ニューヨーク	フーバー	1930年2月24日	1941年6月30日
ストーン、ハーラン・フィスク	ニューヨーク	ローズベルト、F.	1941年7月3日	1946年4月22日
ピンソン、フレッド・ムーア	ケンタッキー	トルーマン	1946年6月24日	1953年9月8日
ウォーレン、アール	カリフォルニア	アイゼンハワー	1953年10月5日	1969年6月23日
バーガー、ウォーレン・アール	バージニア	ニクソン	1969年6月23日	1986年9月26日
レンキスト、ウイリアムH.	バージニア	レーガン	1986年9月26日	
陪席判事				
ラトレッジ、ジョーン	サウスカロライナ	ワシントン	(a) 1790年2月15日	1791年3月5日
クシング、ウイリアム	マサチューセッツ	ワシントン	(c) 1790年2月2日	1810年9月13日
ウイルソン、ジェームズ	ペンシルバニア	ワシントン	(b) 1789年10月5日	1798年8月21日
ブレアー、ジョーン	バージニア	ワシントン	(c) 1790年2月2日	1795年10月25日
アイアーデル、ジェームズ	ノースカロライナ	ワシントン	(b) 1790年5月12日	1799年10月20日
ジョンソン、トーマス	メリーランド	ワシントン	(a) 1792年8月6日	1793年1月16日
ピーターソン、ウイリアム	ニュージャージー	ワシントン	(a) 1793年3月11日	1806年9月9日
チェース、サミュエル	メリーランド	ワシントン	1796年2月4日	1811年6月19日
ワシントン、ブッシュロッド	バージニア	アダムス、ジョーン	(c) 1799年2月4日	1829年11月26日
ムーア、アルフレッド	ノースカロライナ	アダムス、ジョーン	(a) 1800年4月21日	1804年1月26日
ジョンソン、ウイリアム	サウスカロライナ	ジェファークソン	1804年5月7日	1834年8月4日
リビングストーン、ヘンリー・ブロッホホースト	ニューヨーク	ジェファークソン	1807年1月20日	1823年3月18日
トッド、トーマス	ケンタッキー	ジェファークソン	(a) 1807年5月4日	1826年2月7日
ドゥボール、ガブリエル	メリーランド	マジンソン	(a) 1811年11月23日	1835年1月14日
ストーリー、ジョセフ	マサチューセッツ	マジンソン	(c) 1812年2月3日	1845年9月10日
トンプソン、スミス	ニューヨーク	モンロー	(b) 1823年9月1日	1843年12月18日
トリンプル、ローバート	ケンタッキー	アダムス、J.Q.	(a) 1826年6月16日	1828年8月25日
マクリー、ジョーン	オハイオ	ジャクソン	(c) 1830年1月11日	1861年4月4日
ボールドウィン、ヘンリー	ペンシルバニア	ジャクソン	1830年1月18日	1844年4月21日
ウエイ、ジェームズ・ムーア	ジョージア	ジョクソン	1835年1月14日	1867年7月5日
バーバー、フィリップ・ベンドルトン	バージニア	ジャクソン	1836年5月12日	1841年2月25日
カトロン、ジョーン	テネシー	バンビューレン	1837年5月1日	1865年5月30日
マッキンリー、ジョーン	アラバマ	バンビューレン	(c) 1838年1月9日	1852年7月19日
ダニエル、ピーター・ピピアン	バージニア	バンビューレン	(c) 1842年1月10日	1860年5月31日
ネルソン、サミュエル	ニューヨーク	タイラー	1845年2月27日	1872年11月28日
ウッドベリー、レビー	ニューハンプシャー	ポーク	(b) 1845年9月23日	1851年9月4日
グライー、ロバート・クーパー	ペンシルバニア	ポーク	1846年8月10日	1870年1月31日
カーティス、ベンジャミン・ロビンズ	マサチューセッツ	フィルモア	(b) 1851年10月10日	1857年9月30日
キャンベル、ジョーン・アーキボルド	アラバマ	ピアース	(c) 1853年4月11日	1861年4月30日
クリフォード、ネーサン	メーン	ブキャナン	1858年1月21日	1881年7月25日
スウェイン、ノア・ヘインズ	オハイオ	リンカーン	1862年1月27日	1881年1月24日
ミラー、サミュエル・フリーマン	アイオワ	リンカーン	1862年7月21日	1890年10月13日
デービス、デイビッド	イリノイ	リンカーン	1862年12月10日	1877年3月4日
フィールド、ステファン・ジョンソン	カリフォルニア	リンカーン	1863年5月20日	1897年12月1日
ストロング、ウイリアム	ペンシルバニア	グラント	1870年3月14日	1880年12月14日
ブラッドレー、ジョセフP.	ニュージャージー	グラント	1870年3月23日	1892年1月22日
ハント、ワード	ニューヨーク	グラント	1873年1月9日	1882年1月27日
ハーラン、ジョーン・マーシャル	ケンタッキー	ヘイズ	1877年12月10日	1911年10月14日
ウッズ、ウイリアム・バーナム	ジョージア	ヘイズ	1881年1月5日	1887年5月14日

氏名	出身州	任命大統領	(B) 司法宣誓日	任務終了日
マテウス、スタンレイ	オハイオ	ガーフィールド	1881年5月17日	1889年3月22日
グレイ、ホーレース	マサチューセッツ	アーサー	1882年1月9日	1902年9月15日
ブラッチフォード、サミュエル	ニューヨーク	アーサー	1882年4月3日	1893年7月7日
ラマー、ルシアス・キングダム	ミシシッピ	クレブランド	1888年1月18日	1893年1月23日
ブルーアー、デイビッド・ジョサイア	カンザス	ハリソン	1890年1月6日	1910年3月28日
ブラウン、ヘンリー・ピリング	ミシガン	ハリソン	1891年1月5日	1906年5月28日
シラス、ジョージ、JR.	ペンシルバニア	ハリソン	1892年10月10日	1903年2月23日
ジャクソン、ハウエル・エドモンズ	テネシー	ハリソン	1893年3月4日	1895年8月8日
ホワイト、エドワード・ダグラス	ルイジアナ	クレブランド	1894年3月12日	1910年12月18日*
ベッカム、ルーファス・ウィーラー	ニューヨーク	クレブランド	1896年1月6日	1909年10月24日
マッキナー、ジョセフ	カリフォルニア	マッキンリー	1898年1月26日	1925年1月5日
ホームズ、オリバー・ウエンテール	マサチューセッツ	ルーズベルト、T.	1902年12月8日	1932年1月12日
デイ、ウィリアム・ルーファス	オハイオ	ルーズベルト、T.	1903年3月12日	1922年11月13日
ムーディー、ウィリアム・ヘンリー	マサチューセッツ	ルーズベルト、T.	1906年12月17日	1910年11月20日
ラートン、ホーレース・ハーモン	テネシー	タフト	1910年1月3日	1914年7月12日
ヒューズ、チャールズ・エバンズ	ニューヨーク	タフト	1910年10月10日	1916年6月10日
パン・デバンター、ウィリス	ワイオミング	タフト	1911年1月3日	1937年6月2日
ラマー、ジョセフ・ラッカー	ジョージア	タフト	1911年1月3日	1916年1月2日
ビットニー、マーロン	ニュージャージー	タフト	1912年3月18日	1922年12月31日
マクレイノルド、ジェームズ・クラーク	テネシー	ウイルソン	1914年10月12日	1941年1月31日
ブランデイス、ルイス・デンヒツ	マサチューセッツ	ウイルソン	1916年6月5日	1939年2月13日
クラーク、ジョン・ヘッソン	オハイオ	ウイルソン	1916年10月9日	1922年9月18日
サザーランド、ジョージ	ユタ	ハーディング	1922年10月2日	1938年1月17日
パトラー、ピアース	ミネソタ	ハーディング	1923年1月2日	1939年11月16日
サンフォード、エドワード・テリー	テネシー	ハーディング	1923年2月19日	1930年3月8日
ストーン、ハーラン・フィスク	ニューヨーク	クーリッジ	1925年3月2日	1941年7月2日*
ロバート、オーエン・ジョセファス	ペンシルバニア	フーバー	1930年6月2日	1845年7月31日
カルドゾ、ベンジャミン・ネーサン	ニューヨーク	フーバー	1932年3月14日	1938年7月9日
ブラック、ヒューゴ・ラファイエット	アラバマ	ルーズベルト、F.	1937年8月19日	1971年9月17日
リード、スタンレイ・フォーマン	ケンタッキー	ルーズベルト、F.	1938年1月31日	1957年2月25日
ブランクフェーター、フリックス	マサチューセッツ	ルーズベルト、F.	1939年1月30日	1962年8月28日
ダグラス、ウィリアム・オービル	コネチカット	ルーズベルト、F.	1939年4月17日	1975年11月12日
マーフィー、フランク	ミシガン	ルーズベルト、F.	1940年2月5日	1949年7月19日
バーンズ、ジェームズ・フランシス	サウスカロライナ	ルーズベルト、F.	1941年7月8日	1942年10月3日
ジャクソン、ロバート・ヒューワウト	ニューヨーク	ルーズベルト、F.	1941年7月11日	1954年10月9日
ラトレッジ、ワイリー・ブランド	アイオワ	ルーズベルト、F.	1943年2月15日	1949年9月10日
バートン、ハロルド・ヒツ	オハイオ	トルーマン	1945年10月1日	1958年10月13日
クラーク、トム・キャンベル	テキサス	トルーマン	1949年8月24日	1967年6月12日
ミントン、シャーマン	インディアナ	トルーマン	1949年10月12日	1956年10月15日
ハーラン、ジョン・マーシャル	ニューヨーク	アイゼンハワー	1955年3月28日	1971年9月23日
ブレナン、ウィリアム J. Jr.	ニュージャージー	アイゼンハワー	1956年10月16日	1990年7月20日
ウィッティカー、チャールズ・エバンズ	ミズーリ	アイゼンハワー	1957年3月25日	1962年3月31日
スチュアーアート、ポッター	オハイオ	アイゼンハワー	1958年10月14日	1981年7月3日
ホワイト、バイロン・レイモンド	コロラド	ケネディ	1962年4月16日	1993年6月28日
ゴールドバーグ、アーサー・ジョセフ	イリノイ	ケネディ	1962年10月1日	1965年7月25日
フォータス、エーブ	テネシー	ジョンソン、L.	1965年10月4日	1969年5月14日
マーシャル、サーグッド	ニューヨーク	ジョンソン、L.	1967年10月2日	1991年10月1日
ブラックマン、ハリー A.	ミネソタ	ニクソン	1970年6月9日	1994年8月3日
パウエル、ルイス E., Jr.	バージニア	ニクソン	1972年1月7日	1987年6月26日
レンキスト、ウィリアム H.	アリゾナ	ニクソン	1972年1月7日	1986年9月26日*
スティープンズ、ジョン・ポール	イリノイ	フォード	1975年12月19日	
オコーナー、サンドラ・デイ	アリゾナ	レーガン	1981年9月25日	
スカリア、アントニン	バージニア	レーガン	1986年9月26日	
ケネディ、アントニー M.	カリフォルニア	レーガン	1988年2月18日	
スーター、デイビッド H.	ニューハンプシャー	ブッシュ	1990年10月9日	
トーマス、クレアランス	ジョージア	ブッシュ	1991年10月23日	
キングズバーク、ルースベーター	ニューヨーク	クリントン	1993年8月10日	
ブライヤー、ステファン G.	マサチューセッツ	クリントン	1994年8月3日	

注：ここでは規定の宣誓を誓い証明を受けた被任命者の任命、および職権の受理を記載。これにあてはまらない個人名は裁判所のメンバーとして本一覧に記載されていない。例：ロバート・ハントン・ハリソンは、1790年2月9日付けワシントン大統領による書簡によると、任務を拒否したため本一覧には記載されていない。また、裁判所のメンバーとなるために必要な手続き前に逝去したエドウィン M. スタントンも記載されていない。ラトレッジ長官は宣誓を誓い、1795年8月会期の任務を遂行し、同会期の裁判所意見書2通に同氏の氏名が記載されているので本一覧に含まれる。

裁判所のメンバーが司法宣誓を誓った日付をここの任期開始日とする。宣誓を誓うまでの期間は裁判所の特権を付与されない。（司法例によると、「最高裁判所判事、ならびに地方裁判所の判事は裁判所の任務の遂行開始前に下記に示す宣誓を行う」と記されている。）この欄に示されている日付は任命の受理に続く、宣誓日、小文字の参照のない日付は裁判所の議事録より転記。

もしくはキュレーターへの保管する宣誓の原本からの転記。(a) は外部裁判所の議事録による。(b) は疑問の余地のない権威による。(c) は疑念の余地があり、高等の権威の承認が望ましい。

裁判所の建物

「国家は永続する。これはその忠誠を象徴するものである。」この言葉は1932年10月13日、最高裁判所建築の定礎式におけるチャールズ・エバンズ・ヒューズ長官の演説から引用した言葉です。これはアメリカの機構における最高裁判所の重要性を述べています。

驚くべきことに、政府の同格分権機関としての役割にもかかわらず、最高裁判所はその歴史の146年目を迎える1935年になるまで独自の建物がありませんでした。

当初の法廷はニューヨーク市のマーチャント・エクスチェンジ・ビルで開廷されていました。1790年に首都がフィラデルフィアに遷都されると裁判所もこれにもなって移動し、独立記念館に判事室を設け、後に市庁舎へと移動しました。

1800年に連邦政府が、現在の首都ワシントンD.C.に遷都されると、再度、裁判所もこれにもなって移動しました。最高裁判所の建物に関する規定は定められていないため、議会が新しい国会議事堂の一角を裁判所に貸与しました。

裁判所は議事堂内においても5、6回にわたってその開廷場所を変更しました。これに加え、1812年、議事堂が英国による戦火に見舞われると、法廷はしばしの間、個人邸宅で開廷されました。

正面入口の上部の西側ペディメント（切り妻壁）の彫刻はロバート・エトキン作。「王座に就く自由」とこれを守る秩序と権威を象徴。



この後、裁判所は議事堂に戻され、1819年より1860年までの間、現在「旧最高裁判所判事室」と呼ばれる修復された判事室で開廷されました。1860年より1935年までの間は、現在、「旧上院判事室」として知られる部屋で開廷されました。

1909年より1913年までアメリカ合衆国大統領を務めたウィリアム・ハワード・タフトが長官となると1929年、この状況に終わりを告げ、裁判所の永住地の建築許可を下すよう議会を遂に説き伏せました。建築家カース・ギルバートがタフト長官により「アメリカ合衆国最高裁判所の永住の地としてその役割に見合う威厳と重要性を備えた建物」を設計するよう任命されました。

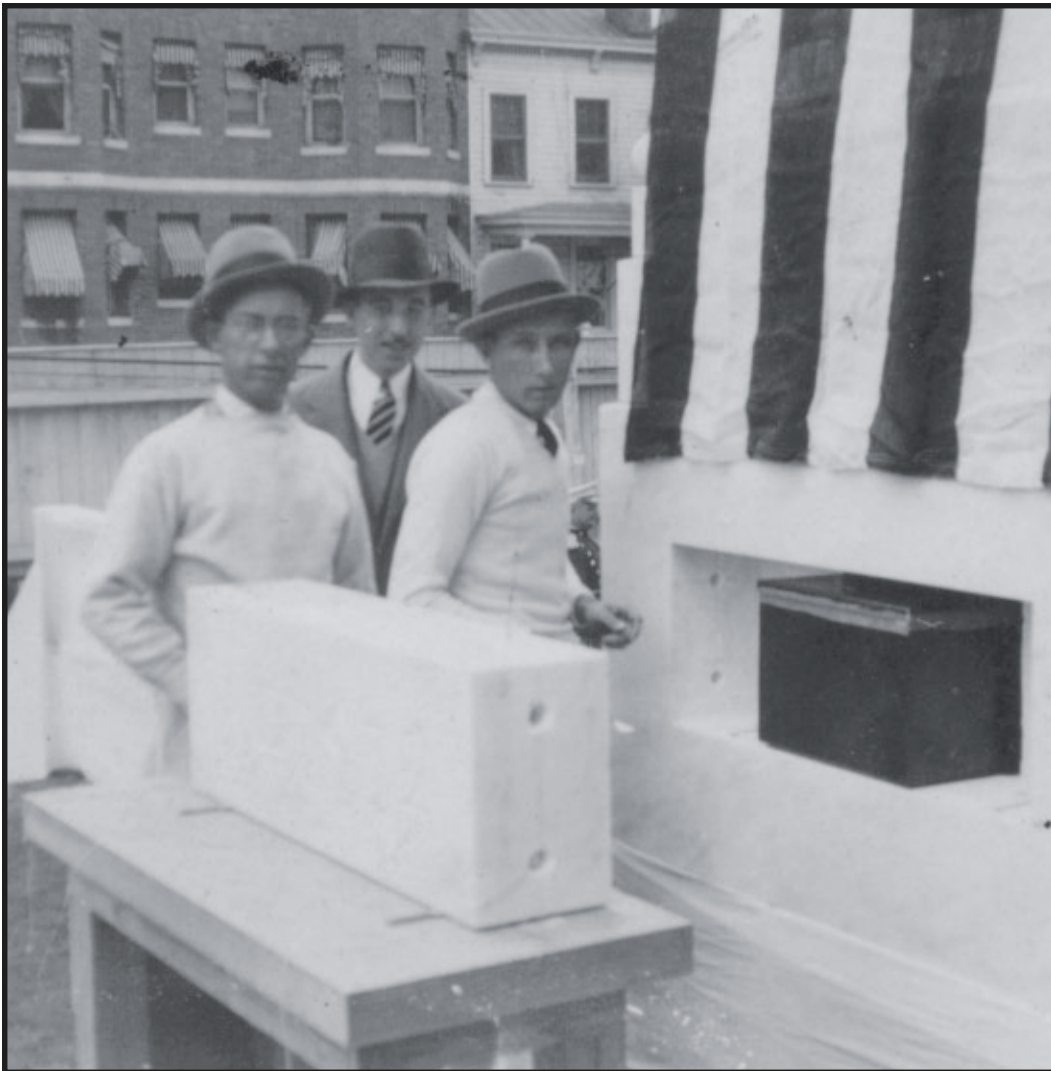
タフトもギルバートも最高裁判所の建物の完成を目にすることなく逝去し、工事はヒューズ長官の指揮の下に建築家カース・ギルバートの息子とジョン R. ロッカーの手で続行されました。1932年に開始された工事は1935年に完成し、裁判所は遂に独自の建物を所有する運びとなりました。

建築方式としては付近の国会関連建築物との調和を鑑み最も適当と思われる古代コリント様式が取り入れられました。

建物の規模は、アメリカ合衆国政府の独立した同格の分権機関として裁判所と司法の重要性と威厳を維持し、「最高の権威を誇る国家の理想的正義」の象徴となるよう設計されました。

建物の概寸は東西に385フィート（正面から後方）、南北に304フィートです。建物はテラスのレベル、つまりグラウンド・フロアから最頂点の4階まで聳え立ちます。主要な建材には大理石が採用され、300万ドル相当の大理石が国内外の採石場から取り寄せられました。外装にはバーモント州の大理石が使われ、4つの中庭には水晶をちりばめたようなジョージア州の大理石が使用されました。地階以上の階のすべての回廊の壁と床、さらに入口のホールは完全に、あるいは部分的にクリーム色のアラバマ州産大理石が使用されています。ドア、装飾、羽目板、床の一部など建物内の各オフィスに使用される木材はアメリカで伐採された白樫を使用しています。

下記は1932年10月13日の定礎式の模様。職人がビルの北東の角に基石を収める。



裁判所の建物は議会在が工事費として認可した974万ドルを下回るコストで建設されました。企画者は当初、プロジェクトに追加充当金が必要であろうと考えていたにもかかわらず、最終完成建物のコストは充当金を下回ったばかりではなく、すべての調度まで既に調達済みでした。こうしてプロジェクト完成時に9万4,000ドルが国庫に返還されました。

建物の案内

最高裁判所の正面入口はアメリカ合衆国国会議事堂に面した西側に位置します。なだらかな階段のふもと、建物の正面には幅100フィートにおよぶ楕円形の広場が広がります。これらの階段を彩るのは四角い台座に据えられた大理石の対の肖像は、剣と秤をもった正義の女神と人生の糸を紡ぐ運命の三女神を表わしています。また、広場の両側に噴水、旗台、ベンチが設けられています。ブロンズの旗台の台座は秤と剣、文献、マスクと大松、ペンと鉾、さらに4つの要素である空気、土、火、水といった象徴的なデザインで飾られています。

正面階段の両側の大きな大理石の肖像は彫刻家、ジェームズ・アール・フレイザーの作品です。左側は女性像、「正義の熟視」（コンテンプレーション・オブ・ジャスティス）。右側は男性像、「法の番人」です。

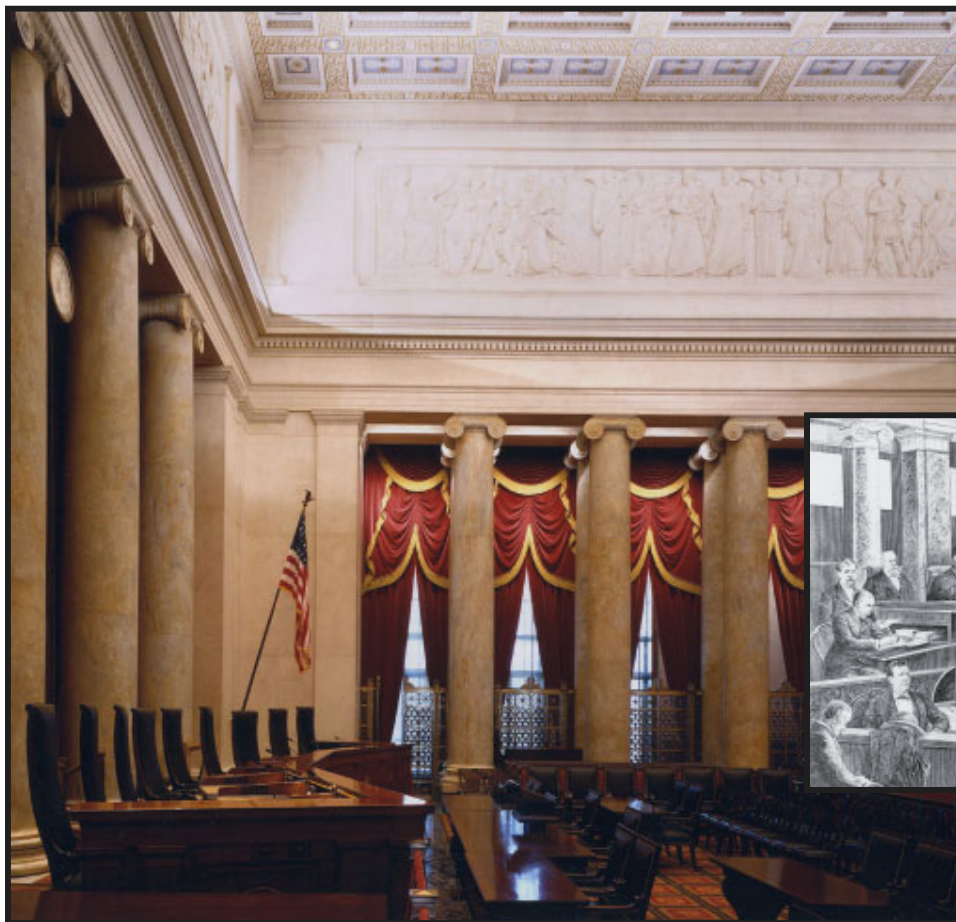
西正面入口の16の大理石の柱がペディメントを支えています。上部には「法の下の平等な正義」と刻まれています。入口の真上は「王座に就く自由」とこれを守る秩序と権威を象徴するロバート・エトキンによる彫刻です。さらに、両脇に評議と探求を象徴するそれぞれ3つの肖像があります。これは立法、あるいは最高裁判所の設立に顕著な貢献を果たした個人にちなんでエトキンが創作したものです。左は、若き日のタフト長官、國務長官エリフルート、さらに建築家カース・ギルバート。右はヒューズ長官、彫刻家エトキン、若き日のマーシャル長官です。

見学者の多くが東側のペディメントと柱の調和を見逃しているようです。ここに型取られた彫刻はハーマン A. マクニールの作品です。大理石の肖像は偉大なる立法者、モーゼ、孔子、ソロンを表わしており、その側面は法の行使手段、正義にも慈悲の心、国家間の論争の解決、最高裁判所の海事その他の機能を象徴しています。台座には「自由の番人である正義」と刻まれています。西正面に開かれたブロンズの扉から建物に入ることができます。各扉は重さが6.5トンもあり、開口時には壁がんにスライドします。ジョン・ドネリー Jr.による彫刻の施された扉の表面は、法の形成時期における歴史のワン・シーンを示しています。イリアッド叙事詩に唄われるアキレスの盾に見られる裁判シーン。勅令を下す古代ローマの執行官、ユリウスとその使徒達、法典を發布するユスチニアヌス。マグナカルタに捺印するジョン王、始めてのウエストミンスター条例を發布する参事、ジェームズ王を判事席から弾劾するコーク卿、さらにマーシャル長官と正義の物語が、舞台になっています。

正面回廊はグレート・ホールと呼ばれます。両脇の2列に並んだ一枚石の大理石の柱が格天井を支えます。両脇の壁面に設置された大理石の台座には前長官の胸像が交互に飾られ、小壁には立法者の浮き彫りと紋章模様が施されています。

グレート・ホールの東の突き当たりには櫺の扉が法廷へと開かれています。この厳かな部屋は縦横が82フィートと91フィートで、天井は44フィートの高さです。ここに見られる24の柱はイタリアのリグリアから取り寄せられたオールド・コンヴェント・コーリー・シエナ大理石で作られています。壁と小壁にはスペインのアリカンテから運ばれたアイボリー・ベイン大理石が使用されています。床のへりにはイタリアとアフリカの大大理石が使用されています。

開廷期間中に判事が着席する場所となる後方の高いベンチと法廷内のその他の調度はマホガニー製です。ベンチは1972年に直線状から「翼面」状に変更され、本来の設計にさらに優れた視界と音響効果の利点を加えました。



左はアメリカ合衆国最高裁判所の法廷。
下部はハーバース・ウィークリー、1860年から1935年まで法廷が開かれたアメリカ合衆国国会議事堂の旧上院判事室での口頭弁論の様。カール・ベッカーによる。1888年。



ベンチの左に位置するのは裁判所書記官のデスクです。書記官は法廷の未決訴訟事件一覧の管理、弁論のスケジュール、最高裁判所弁護士会への弁護士の承認の監督、さらにその他の関連事項を司る任務を負います。右側に位置するのは法廷の執行官のデスクです。執行官は法廷のタイムキーパーの役割を果たし弁護士に対して白と赤の明かりで時間制限を知らせます。執行官の任務には建物の維持と警備、さらに裁判所建物管理者としての任務などがあります。

法廷で訴訟を争う弁護士はベンチの前のテーブルを使用します。それぞれ弁論の機会が巡ってくると中央の聖書台からベンチに向かい弁論を繰り広げます。ブロンズの柵が最高裁判所弁護士団の特別席と一般への公開席を隔てています。

記者代表は法廷の左側にある赤いベンチを使用します。右側の赤いベンチは判事の客員用に指定されています。これらのベンチの前にある黒い椅子は法廷のオフィサー、ならびに客員高官のためのものです。



大理石で造られた支柱のない2つの楕円形の渦巻き階段。ブロンズの柵をもつ地下から4階の図書館までの5階層の上り階段。同様の様式はパリのオペラハウス、バチカン宮殿、ミネソタ州議事堂に見られる。

判事室の四方に添って上部には大理石の彫刻、アドルフ A. ワイマンの作品があります。

ベンチの真上には法の主権と政府の権力を象徴する2つの中心的肖像が見えます。左端は人民の権利、学問と政治の守護を象徴し、右端は基本的人権の保護を象徴しています。

右側には歴史上の立法者、メネラウス、ハンムラビ、モーゼ、ソロモン、リュクルゴス、ソロン、ドラコ、孔子、そしてアウグストゥスなどが型取られています。この肖像群の中には名誉と歴史を象徴した像も見られます。

左側は歴史上の立法者、ナポレオン、ジョン・マーシャル、ウィリアム・ブラックストーン、ヒューゴ・グロチアス、聖者ルイス、ジョン王、シャルルマーニュ大帝、モハメッド、さらにユスチニアヌスなどの肖像です。自由と平和、哲学を象徴した肖像が小壁の両端に表わされています。

後方の小壁には正義を象徴する翼をもった女性像が見られます。これは学問と真実を伴う発想の女神です。左端は保安、調和、平和、慈善、そして美德の守護といった善の力の象徴です。右端には墮落、中傷、虚偽、専制権力の悪の力が象徴されています。

メイン・フロアは判事室、法務事務官室、秘書室、広く正式な東西会議室、執行官のオフィス、首席検事室、弁護士のラウンジ、さらに個別会議室と判事の更衣室でほぼ全体を占めています。このオフィス・スペースはそれぞれ中央に噴水のある4つの中庭を取り囲んでいます。

2階の多くは判決記録係用オフィス、法務室などのオフィス・スペースです。判事の図書館読書室、さらに判事用食堂もこの階に位置します。

図書館は3階に位置し、45万以上の文献を収蔵しています。裁判所の情報ニーズを満たすため、図書館員は書籍の他にも電子読み出しシステム、さらにマイクロフィルムを活用しています。図書館の中央読書室壁面は手彫りの桎が使用されています。建物のその他の部分と同様に木彫り作業はマチュー兄弟による作品です。

グランド・フロアは裁判所書記官のオフィス、長官の事務管理補佐オフィス、警備本部、一般情報オフィス、記者室、キュレーターのオフィス、人事事務オフィスなどのオフィスと一般へのサービスの提供に充てられています。この階から、見学者は大理石でできた2つの渦巻き階段の一方を見学できます。両方とも5階層の上り階段で、積み重ねられた階段自身と壁面への拡張部分のみで支えられています。

見学案内

最高裁判所は各種教育プログラムを提供しています。定期的に変更される展示物、最高裁判所の映像を紹介する映画館はグランド・フロアにあります。法廷での講義は法廷が会期にない時期に限り毎時30分より行われます。

建物は月曜日から金曜日、午前9時から午後4時30分まで開館されています。土曜日、日曜日、祝祭日は休館します。最高裁判所への交通には地下鉄、バスをご利用ください。身体障害者の方も、メリーランド通りの入口から入館できます。

カフェテリア、スナックバー、おみやげ売り場、公衆電話はグランド・フロアに用意されています。



コリント様式の柱頭の石膏模造はふくろうの装飾。ジョン・ドネリーが彫刻を施した柱頭は裁判所の4つの中庭の柱上部に採用。